

設立にあたって

會長 滝沢幸助

我が國は萬葉の昔より「言靈ことたまの幸さきはふ國」と呼ばれ“言葉が國家民族の生命である”とされて來た。

また西洋にあつては、『新約聖書ヨハネ傳』に「太初はじめに言ことばあり、言ことばは神ともと偕ことばにあり、言ことばは神ともなりき」とあり、言葉そのものを神と信じられて來た。

そもそも抑、地上總ての動物の中で言葉を持つものは人間だけであるが、世界すべての言葉のうち、日本語こそが特段に豊かで美しい。これは、日本の國土とその自然の四季が美しく變化する事と合せて、天惠のものであり、民草は、世々この美しい言葉と自然を命として神ながらの國體を顯揚して來た。

然るに戦後、急速に國民の國家意識が衰亡、永きに互る政治と教育の怠荒により、特に五十音圖が崩れ、國歌『君が代』の歌詞までが語意不明瞭となつて久しい。

今こそ、これらを速かに正し、國民の一人一人、國土の隅々まで正文字・正かな遣ひが行はれる様にするところ、實に國家民族存亡にかゝはる大事である。

戦後すでに七十餘年、今こそ國家民族が覺醒し正しい文法・語法が遍く行はれる事により「言靈ことたまの幸さきはふ國」を再生する運動の一兵として起上り廣く同憂同行の士を募る。

國民各界より熱い御理解御協賛がありますことを。

正かなづかひの會趣意書

敗戦直後の昭和二十年八月末、マツカーサーが厚木飛行場に到着して間もなく米軍は占領施政下の日本の公用語を英語とする旨、日本政府に通達した。この折、終戦聯絡を擔當する事務局の長官岡崎勝男はこの米軍の通達に果敢に對應し、わが國における英語の公用語化は回避された。

占領國アメリカによる國語への干渉はこれ以後、昭和二十一年三月に始まる數次にわたるアメリカ教育使節團が聯合國司令部に提出した報告書の中に見ることができ、第一次教育使節團の報告書の「國語の改革」の章では、漢字を廢止し、日本語はローマ字で表記することを目標として國語教育を改めるやう勸告してゐる。占領下の吉田茂内閣はこの占領國の方針に服従し、昭和二十一年十一月、漢字制限を基本精神とする「当用漢字表」と現代語音に基く「現代かなづかい」を内閣訓令・告示を以て公布した。この政府の國語改革の姿勢は敗戦による自信喪失と昏迷のさ中にあつた教育の場に直ちに反映し、近代教育が確立した明治時代よりはるか以前から學習の事始として國民に長く、廣く親しまれてきた「いろは歌」は忽ち追放された。これと同じく五十音圖もまた「い・ゐ」「え・ゑ」「お・を」を同音異字と見做し、「ゐ」「ゑ」は不用として五十音圖から排除され、今日義務教育の多くの教科書に見る「穴アキ五十音圖」となつた。更に國民が親しく唱ふ國歌「君が代」は古歌でありながら、「…さざれ石のいわおとなりて…」とされ、本來の「いはほ」とはほとんど無縁の形で教科書はじめ公式の文書にも平然と載つてゐる。爾來、國語におけるこの混然蕪雜の狀況は國語の諸分野に蔓延して數十年に垂んとしてゐる。

アメリカは日本國家解體につながる英語の公用化と國語表記のローマ字化には失敗した。しかし、日本國民の國語に對する秩序、品位、豊饒さを志向する心と感性を麻痺させ、且つ國語への尊崇の念を破壊したことは明かである。

私どもは政治の場で爲遂げられた誤つた國語施策は、その政治の場において正すべきであると考え、且つ廣く國民に國語の正しき、美しき、豊かさとは何かを訴へ、國語への尊崇の念を再興するため「正かなづかひの會」を結成する。今後、國會、地方議會を中心とする政界と學校教育の現場を基軸とする教育界において隨時、研究會、講習會、講演會を開催し、併せてインターネット、出版物を通じて、本會の精神の普及を圖りたい。